

徳川吉宗の植樹政策



太田 尚宏



8代将軍徳川吉宗

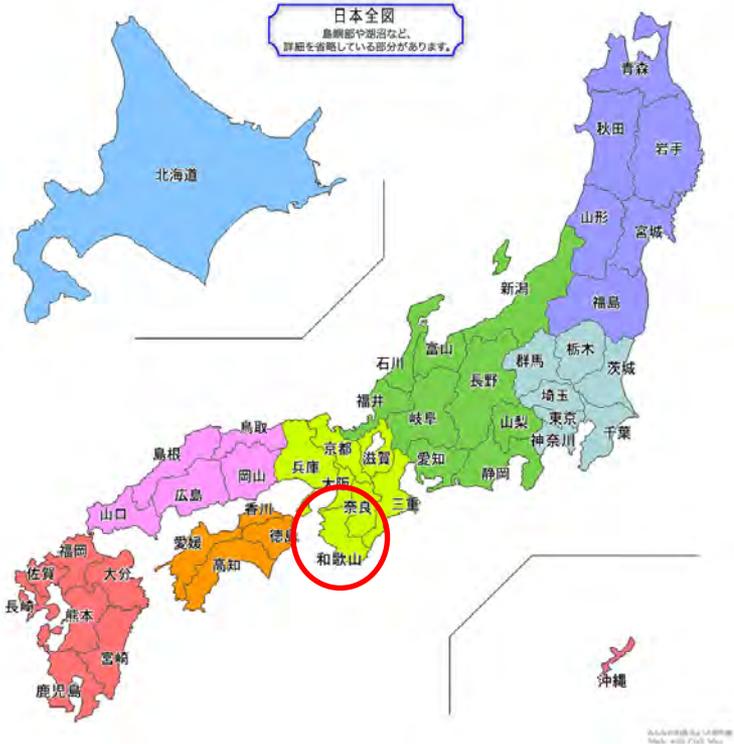
- 貞享元年（1684）10月20日、**紀州**藩主徳川光貞の4男として生まれる（徳川家康の曾孫）。はじめの名前は「頼方」。
- 宝永2年（1705）9月に第5代紀州藩主となり、5代将軍綱吉の命により「吉宗」と名乗る。
- 正徳6年（1716：享保元年）4月、7代将軍徳川家継が8歳で病死し、直系の血筋が絶えたため、**御三家**の中から将軍職を選ぶことになり、吉宗が将軍に就任する。



将軍になってからの最初の政策

享保元年(1716)9月、生類憐み政策により停止していた「鷹場」を復活させ、その後、将軍家鷹場の周囲に御三家鷹場を創設

- ① 放鷹権の独占と分与（=将軍を頂点とする「御鷹」の儀礼の再編成）
- ② 江戸城に近接する地域の掌握



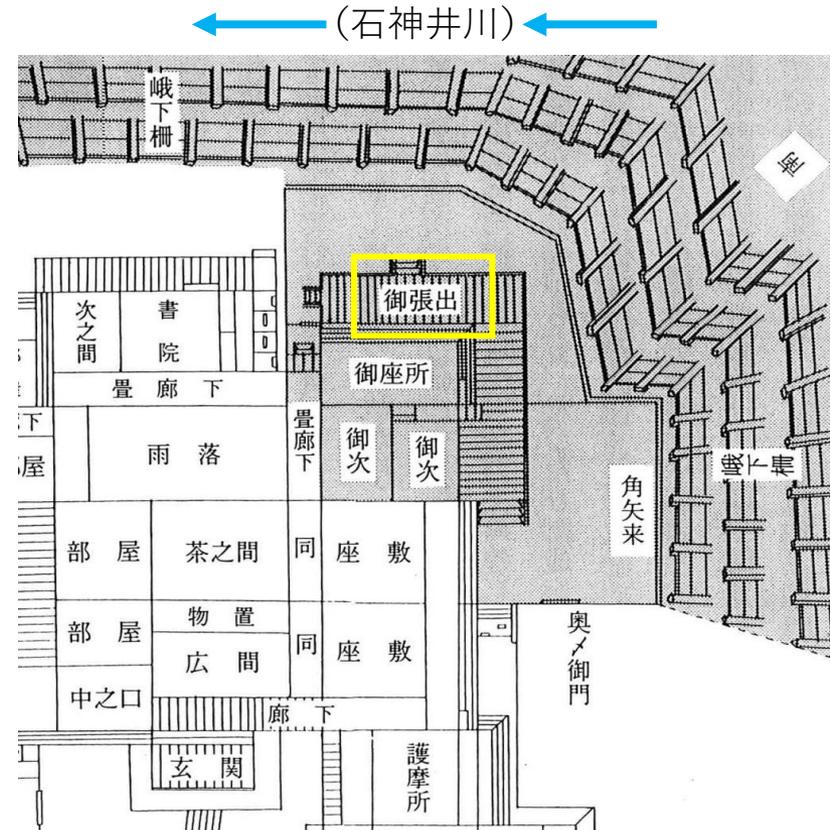
- 熊野古道 中辺路
- 熊野古道 大辺路
- 熊野古道 小辺路
- 熊野古道 伊勢路
- 熊野古道 紀伊路
- 高野山町石道
- 熊野古道 大峯奥駈道

鷹狩と鷹場

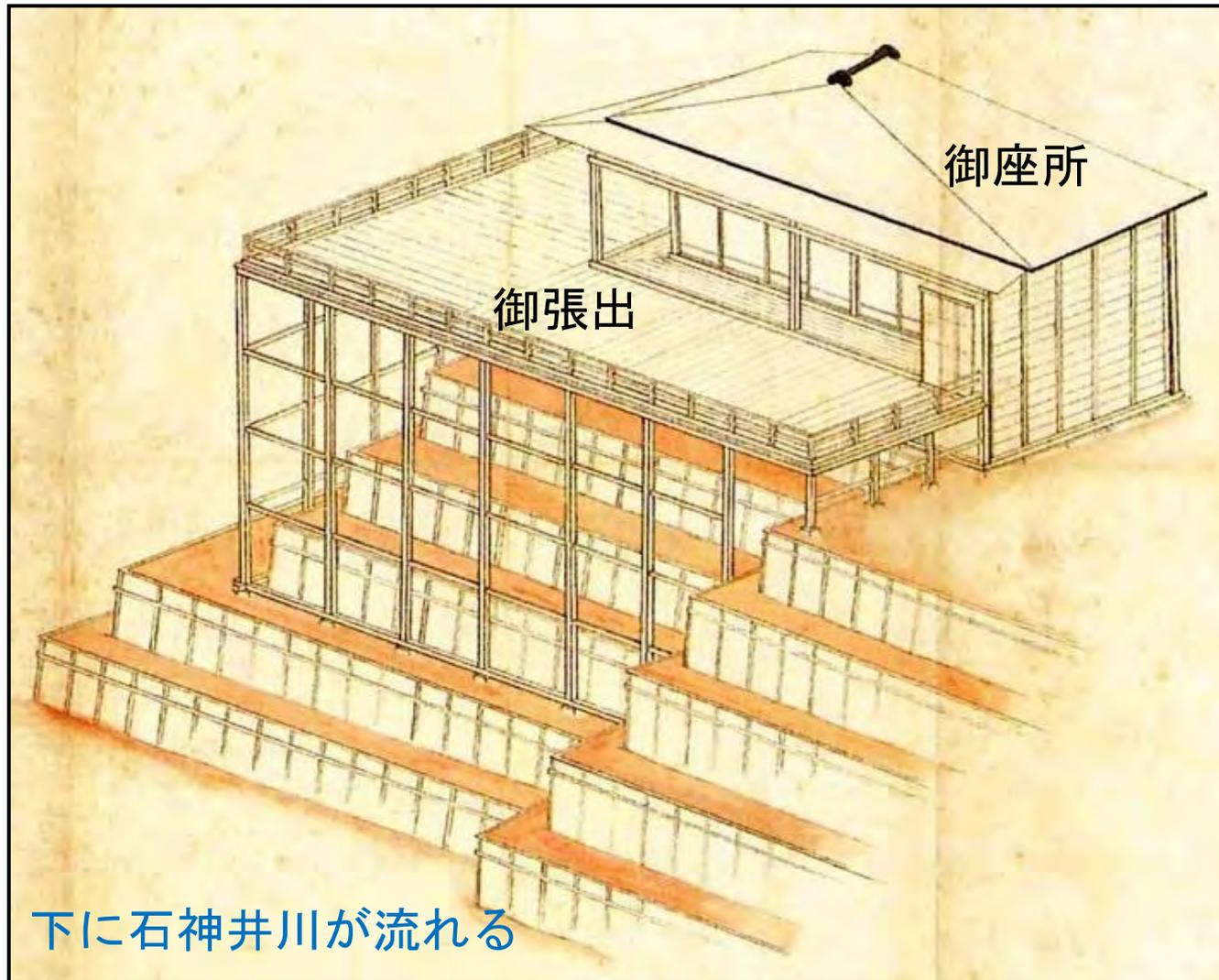


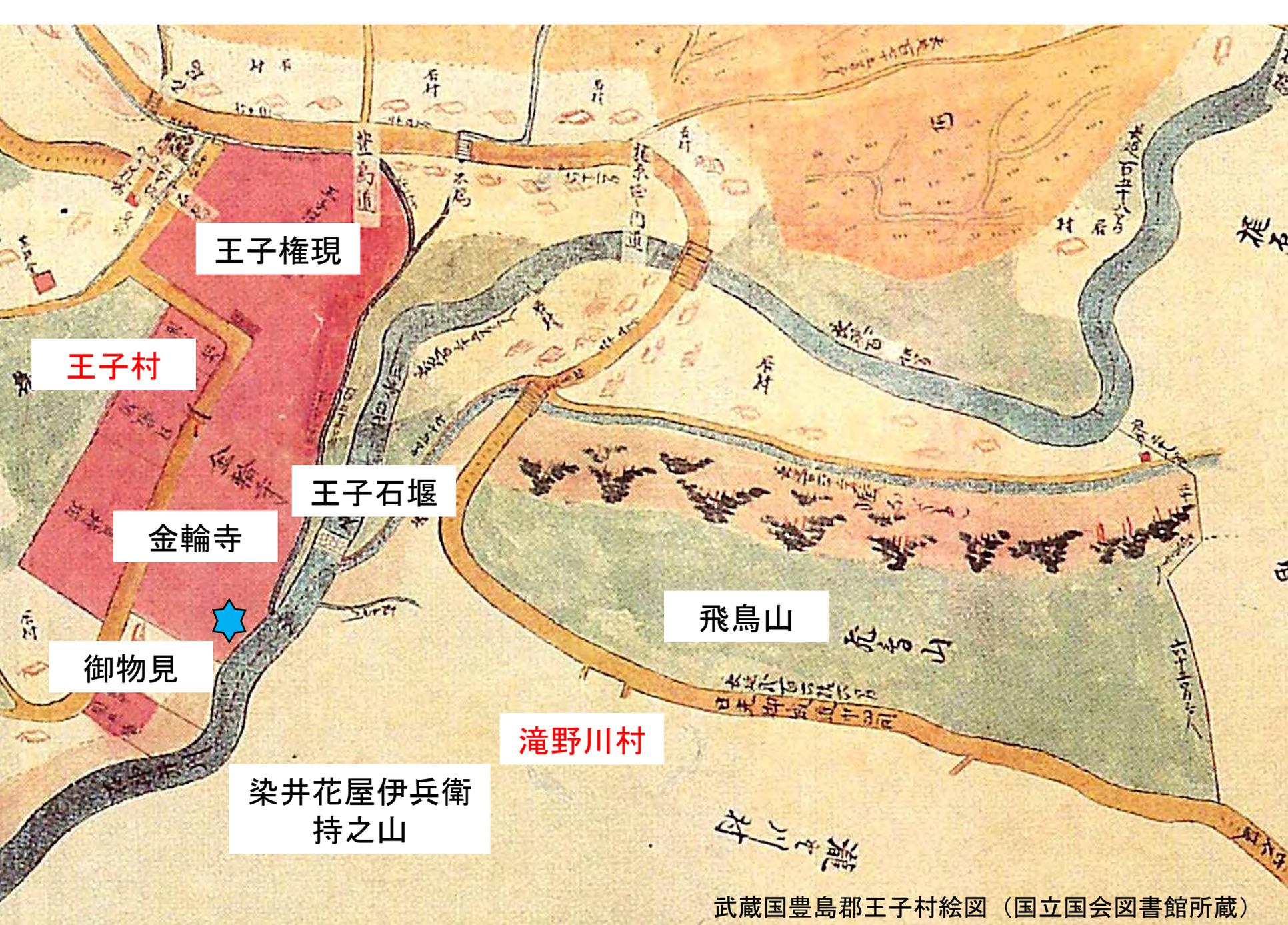
王子村への鷹狩御成

- 享保5年（1721）6月、若年寄の大久保常春・御小納戸の松下当恒らが御成（将軍の外出）の際の御膳所（昼食場所）となる王子村の金輪寺（王子権現社の別当寺）を訪れて、石神井川岸の崖上に「御物見」（＝「御張出御座所」）を設ける旨を申し渡す。
- 享保5年8月11日、将軍吉宗が初めて王子村で鷹狩御成を行う。



金輪寺御物見（御張出）の構造





王子権現

王子村

王子石堰

金輪寺

御物見

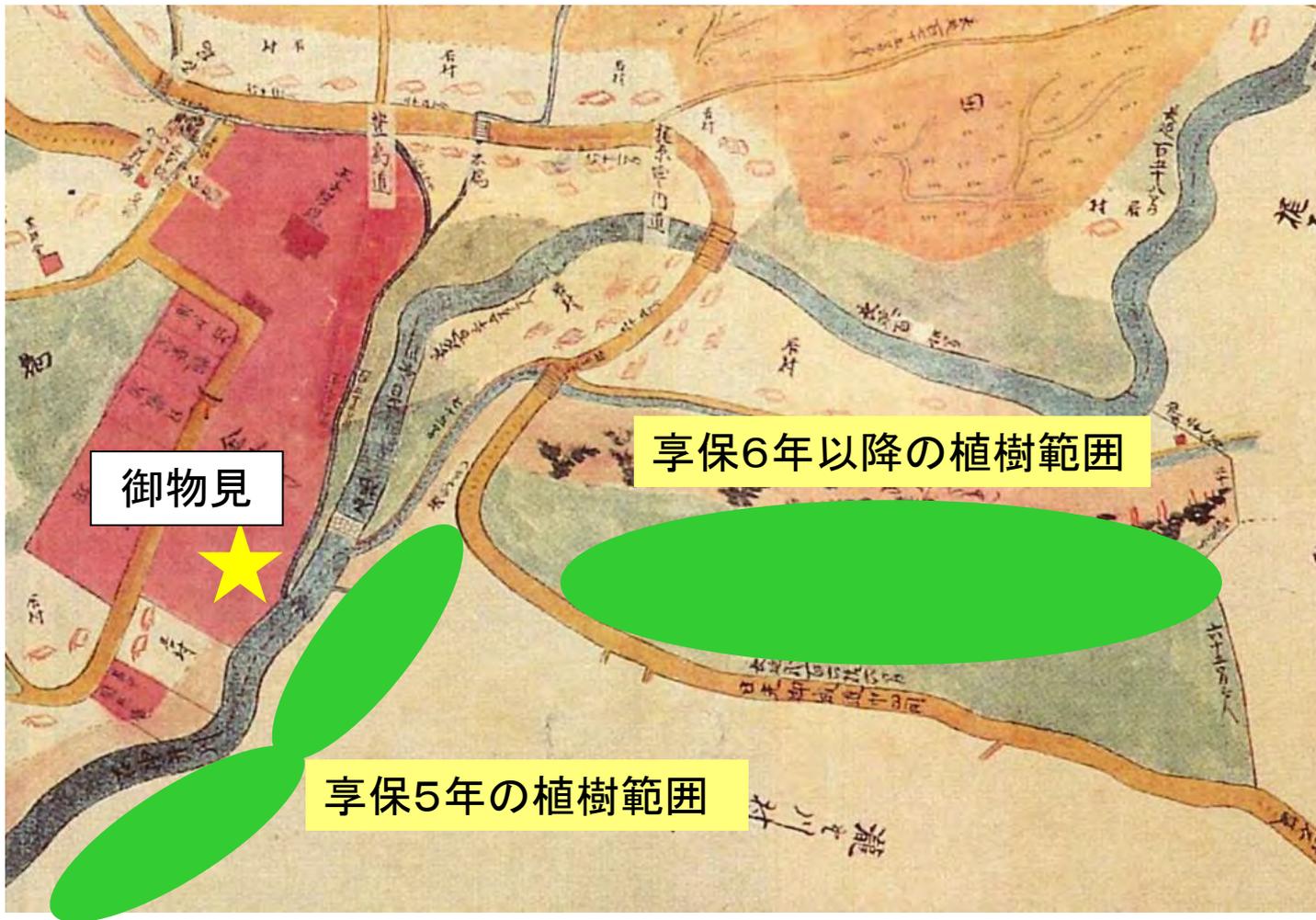
飛鳥山

滝野川村

染井花屋伊兵衛
持之山

武蔵国豊島郡王子村絵図 (国立国会図書館所蔵)

植樹場所の変化



江戸周辺 4 か所への計画的植樹

年次	場所	事項
享保初め頃		吉宗が御小納戸の松下当恒に対し、江戸城吹上にある桜・楓の栽培を命じる〔仰高禄〕
享保2年(1717) 5月	隅田川堤	幕府が隅田村御前栽場沿いの隅田川堤に桜100本を植える〔隅田村坂田家書上〕
享保5年(1720) 6月	王子飛鳥山	松下当恒らが王子金輪寺を鷹狩の際の御座所に決定、御物見の建設を始める〔王子村大岡家文書〕
享保5年(1720) 8月	王子飛鳥山	吉宗が雑司ヶ谷・王子へ初めて鷹狩御成に赴く〔享保遠御成記〕
享保5年(1720) 9月	王子飛鳥山	幕府が王子金輪寺の「御物見向染井花屋伊兵衛持之山」に桜270本を植える〔御場御用留〕
享保6年(1721) 9月	王子飛鳥山	幕府が飛鳥山と石神井川堤に桜1000本を植える〔御場御用留〕
享保6年(1721)	品川御殿山	幕府が桜の植樹を行った御殿山に、無断伐採を禁じた高札を建てる〔新編武蔵風土記稿〕
享保11年(1726)	隅田川堤	幕府が桜・桃・柳150本の植え足しを行い、松下当恒が名主の坂田氏に以後の管理を命じる〔御場御用留〕
享保21年(1736・元文元年) 2月	中野桃園	御小納戸の土岐朝澄が中野村「御囿跡」に緋桃50本の植え付けを命じる(11月に白桃50本を植え足し)〔御場御用留〕

江戸周辺 4 か所への計画的植樹



松下専助（当恒・伊賀守）

松下専助の経歴

- 元紀州藩士（近習番）
- 長福（9代将軍家重）の江戸城入城に供奉して幕臣化
- 享保元年9月9日＝御小納戸
- 享保18年9月11日＝御小納戸頭取
- 同年12月18日＝諸大夫となり伊賀守を名乗る
- 享保19年6月11日＝死去

仰高録
享保の初、吹上御庭へ被為成 御成初り
二度め時歟のよし、**桜・楓の苗数多**
所々二生出有之を被為御覧、**松下専助**
御小納戸・後伊賀守へ被仰付、其苗の
中二も見増なるを見計、取集候て、一所
二植置候様二との御事也、然る所、此苗
五・六尺程つゝにも成し頃、**所々御成先**
へ被遣候

松下専助という人物

近代公実厳秘録

吉宗公の御側にハ、加納遠江守・小笠原石見守・渋谷和泉守など云人ありけれ共、御出頭も第一成しか、其人と成格別にて、下を憐ミ私曲なく万人の幸と成、聊害心なし、**松下専助**などハ格別御出頭たりしか共、曾て其身不誇にして**忠勤第一**也

亨保記

常々御質素の御生にて、あまり重くれたる事ハすかせられず、御湯など召されける時、御浴衣のまゝ御横二被為成すや、御寝入ありしを、御風召されてハと、**其頃思召二応したる松下専助**、御湯殿の御たらひなとかたつかせ御目をさまし奉りし事共有けるとぞ

松下専助という人物

享保記

或時吹上御庭江御好ミにて松並木植付被仰付、並よく植付候様にとの御事なり、吹上奉行承之、松の木植付、内見分を松下専助に申入ル、専助遂見分候処、並不宜、是にてハ御意ニ入ましく如何致へき段申けれハ、奉行も甚恐入しか、専助申様、是を植直し候も大造なり、殊根付候程もしれかたく、先上覧を相願へしと、則御聴ニ入れ御入有之、御覧し並よろしからすとこの御意なり、専助御請ニ急度ならへ植候ては堅なにて、大木小木入交しへ植候方然へき哉と差図仕候段申上けれハ、成ほと尤なりとの上意にて御機嫌よく還御有之ける、心得たる御請なりとそ申ける

水茶屋の設置

御場御用留(飛鳥山)

同(享保)十八巳年二月十七日、**水茶屋**
十ヶ所飛鳥山桜之内え建候様二と**松下**
専助被仰聞、新地奉行日根野左京方え
滝野川村源之丞届候

- 一 山之上 八軒
- 一 金輪寺御物見向道端 二軒

御場御用留(中野桃園)

右御立場近辺、桃花盛之節、葎簀張水
茶屋差出候処、元文三年二月十八日
御成之節、**御立場近辺え葎簀張水茶屋**
拾壹軒願之通相濟、御成先**松下専助**
(昭永・当恒の孫)申渡有之候、勿論定茶
屋二御免相濟候得共、平生は花見も無
之候二付、春桃花咲候時分方落花迄、例
年茶屋差出申候

紙の博物館所蔵史料

王子

金輪寺

飛鳥山葎箆張水茶屋、四坪宛、五拾

四ヶ所

同所葎箆張揚弓場、拾四坪宛、三ヶ所

音無川両土手・川中共葎箆張水茶屋、

四坪宛、九ヶ所

右は当二月七日と同六月晦日迄差置

度旨相願之、向後毎年二月より六月晦日

迄、水茶屋両所にて六拾三ヶ所并揚弓

場三ヶ所、絵図面之通々差免候間、毎

春願出候におよはず

但、音無川水茶屋八金輪寺え御成之節

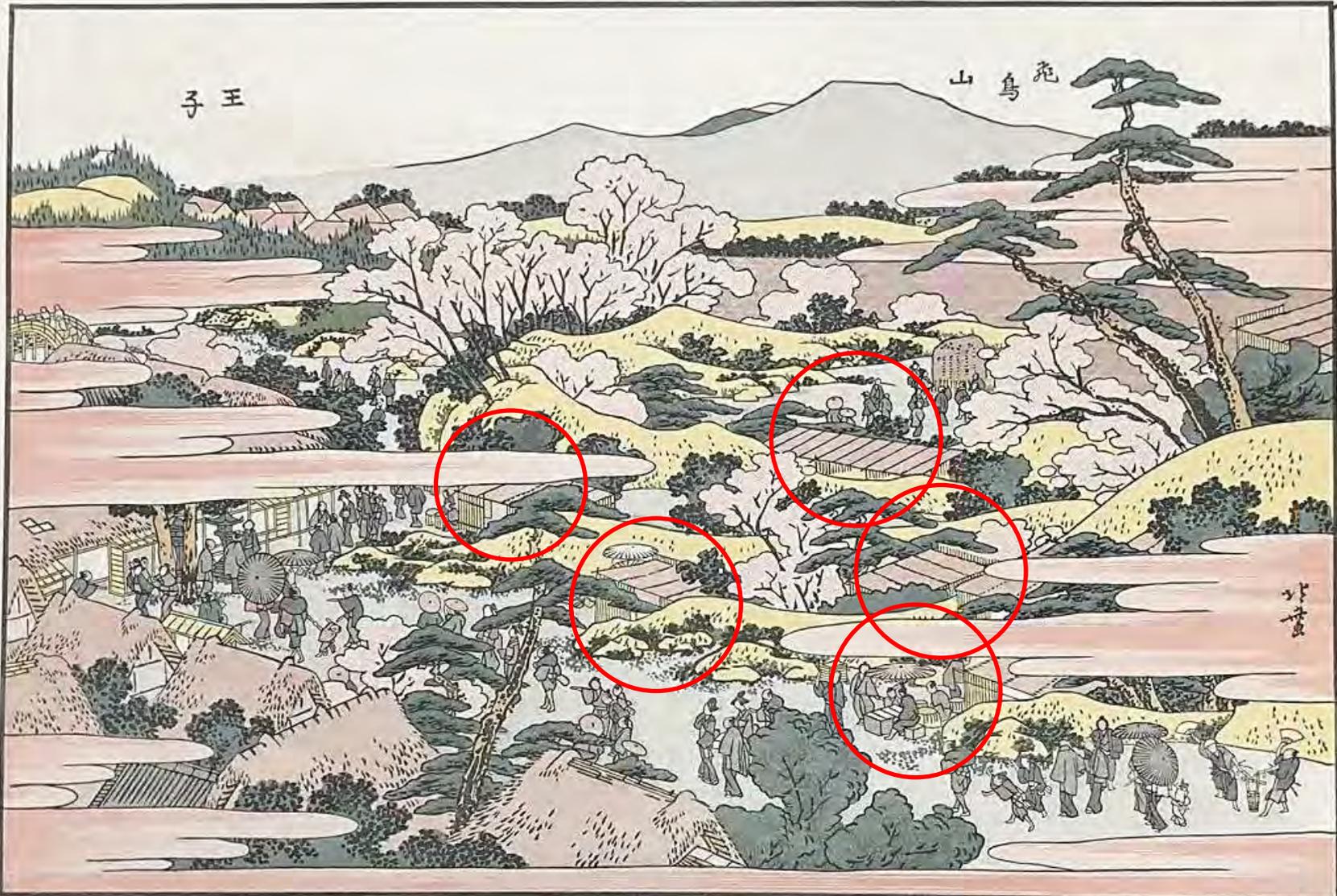
御目通りにて、御目障二成候ハ、御成之

度々可取払候

(元文三年)午二月

右之通、寺社奉行大岡越前守殿被仰渡
候

葛飾北斎の錦絵に描かれた水茶屋

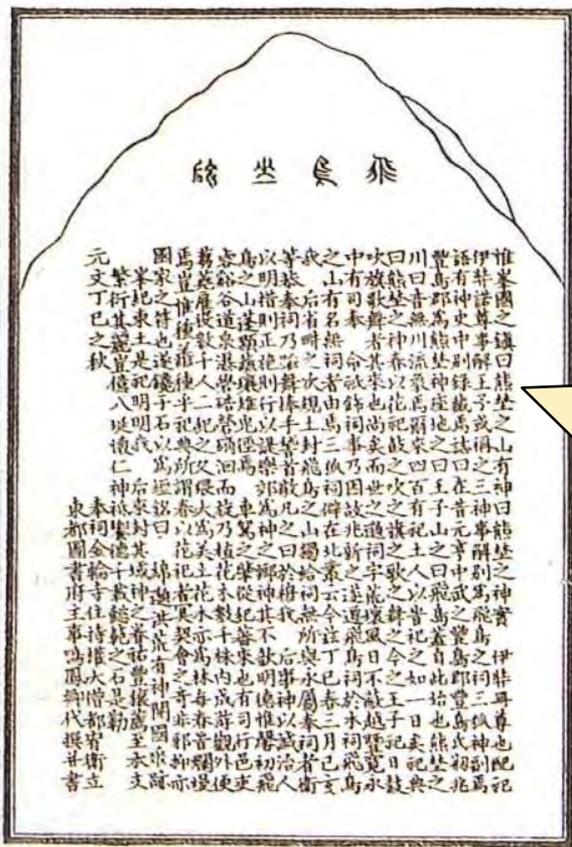


新板浮繪王子稻荷飛鳥山圖繪師北斎
下谷池端仲通
伊勢屋利兵衛板

王子

飛鳥山

飛鳥山の寄進と石碑の建立



吉宗の施策を美化

- ① 紀州熊野の三所権現を
勸請した王子権現の来歴
- ② 飛鳥山に桜を植えて庶
民に開放した事跡

側近たちに花見を勧める

視聽草

享保の頃、飛鳥山の花盛には時々、今日ハよき天気なるぞ、友ニ、花見に参れと御意ありて、御自ら色々御世話遊ばし、種々の生肴を夥しく下され、御酒多く携、御鳥見壺人同道にて新組二酒肴を持せ、花の下に薄べりを多く敷き、花見の人を呼込て酒を飲ましむ、器物類皆御紋付なれば、如何なることにやと飲ものも少かりしに、年々のことなれば、後には来て飲ものも多かりし、暮に及て御城へ帰り、夥敷見物にて御酒などことごとく尽し候と申上れば、殊の外御機嫌なりと云々



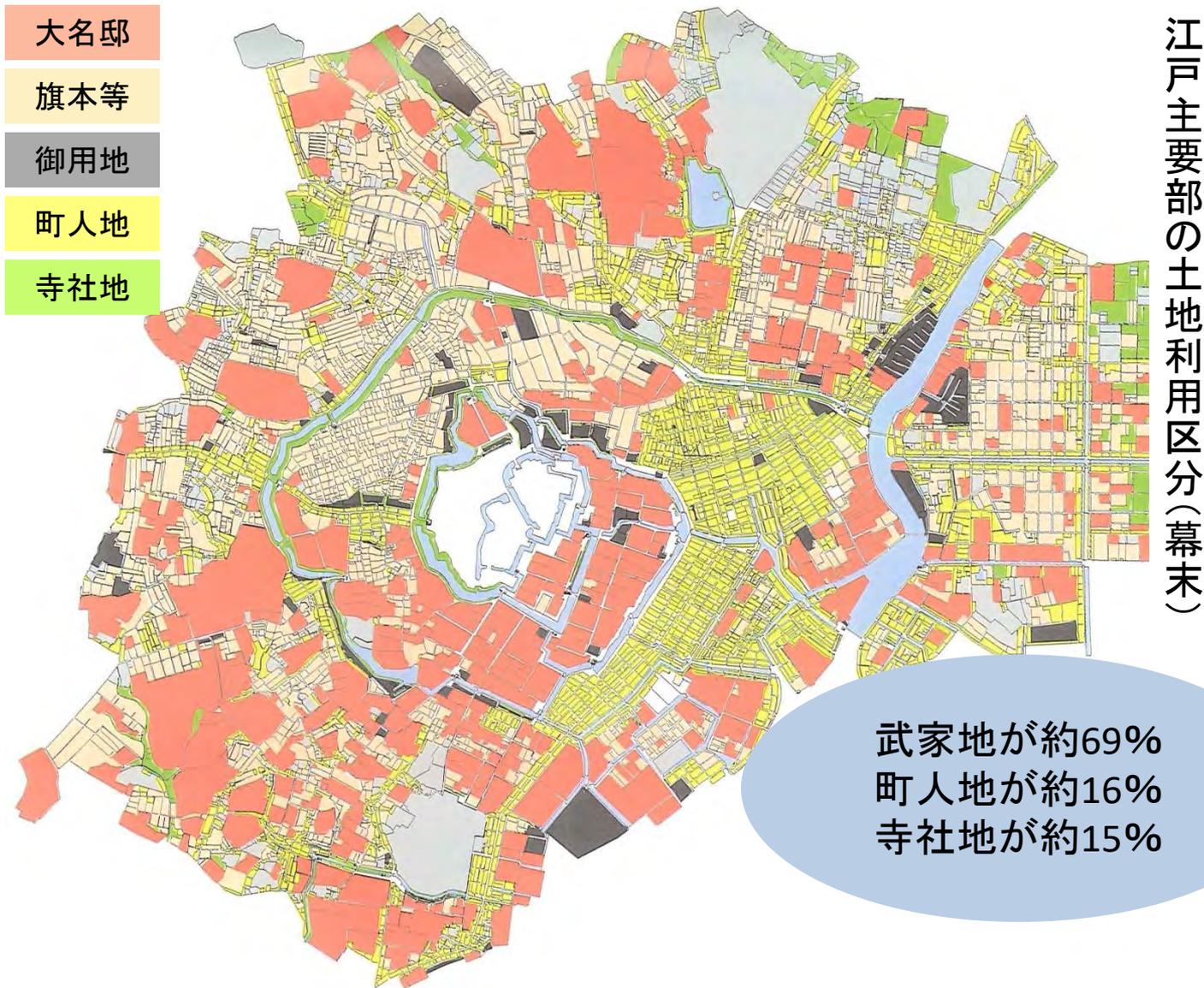
側近たちに花見を勧める



有徳院殿御実紀附録

花・都鳥・月・雪の折にふれ、近侍の人々、
または河合久円盛盈・糸川元清安長・成
島道筑信遍等、そのほかちかく給事す
るものを五・六人ずつ、ひめもすいとま
賜わりて、**飛鳥山・墨田川・中野**などい
える所に遊ばしめ、行厨・酒菓などをた
べて楽しめらる、かえり来れば、今日は
遊人の多かりしや、土人も潤沢をうる
さまなるやなど尋ね給い、またはその
人々の才に应じて、和漢の文章・詩歌な
どつくらしめて、御覧せらるる事しばし
ばなり

過密な都市「江戸」



「延気」の場としての“小さな自然”

- 江戸の土地利用の69%を占める武家地

このうち大名藩邸では、広大な敷地の中に数多くの施設を配置

- 上屋敷＝藩主らの住居となる御殿・藩の政庁・勤番長屋など
- 中屋敷＝隠居所・前藩主遺族の住居・勤番長屋など
- 下屋敷＝休息所・接待所・火災時の避難所・庭園・菜園・勤番長屋など

大名藩邸では、各屋敷にさまざまな工夫を施した庭園がつくられる

- 江戸の土地利用の16%を占める町人地

わずかな土地の中に約50万人が居住＝高い人口密度・息苦しい生活

「延気」(気晴らし)のための工夫＝草花を愛でる・花見に行く

- 江戸の土地利用の15%を占める寺社地

堂舎をとりまく鬱蒼とした境内林

庶民の寺社参詣は、自然に触れて「延気」をする機会でもある

将軍の存在を意識させる空間

植樹された場所は、いずれも
将軍の“御成”と密接に関わ
る場所

隅田川堤

= 御前栽場 (旧御殿)

王子飛鳥山

= 御膳所・御物見

品川御殿山

= 御立場 (鷹狩の舞台)

中野桃園

= 御立場 (鷹狩の舞台)

浅草寺日記

浅草寺観音御成跡開帳被仰付候先例
之儀は、享保十八年丑三月十六日大御
所様(吉宗)御成之節、観音御拝被遊御
跡にて、直二三月十六日方同月廿三日
迄諸人為拜可申旨、其節御供松下伊賀
守殿被仰渡候

(延享三年) 寅四月

浅草寺留守居

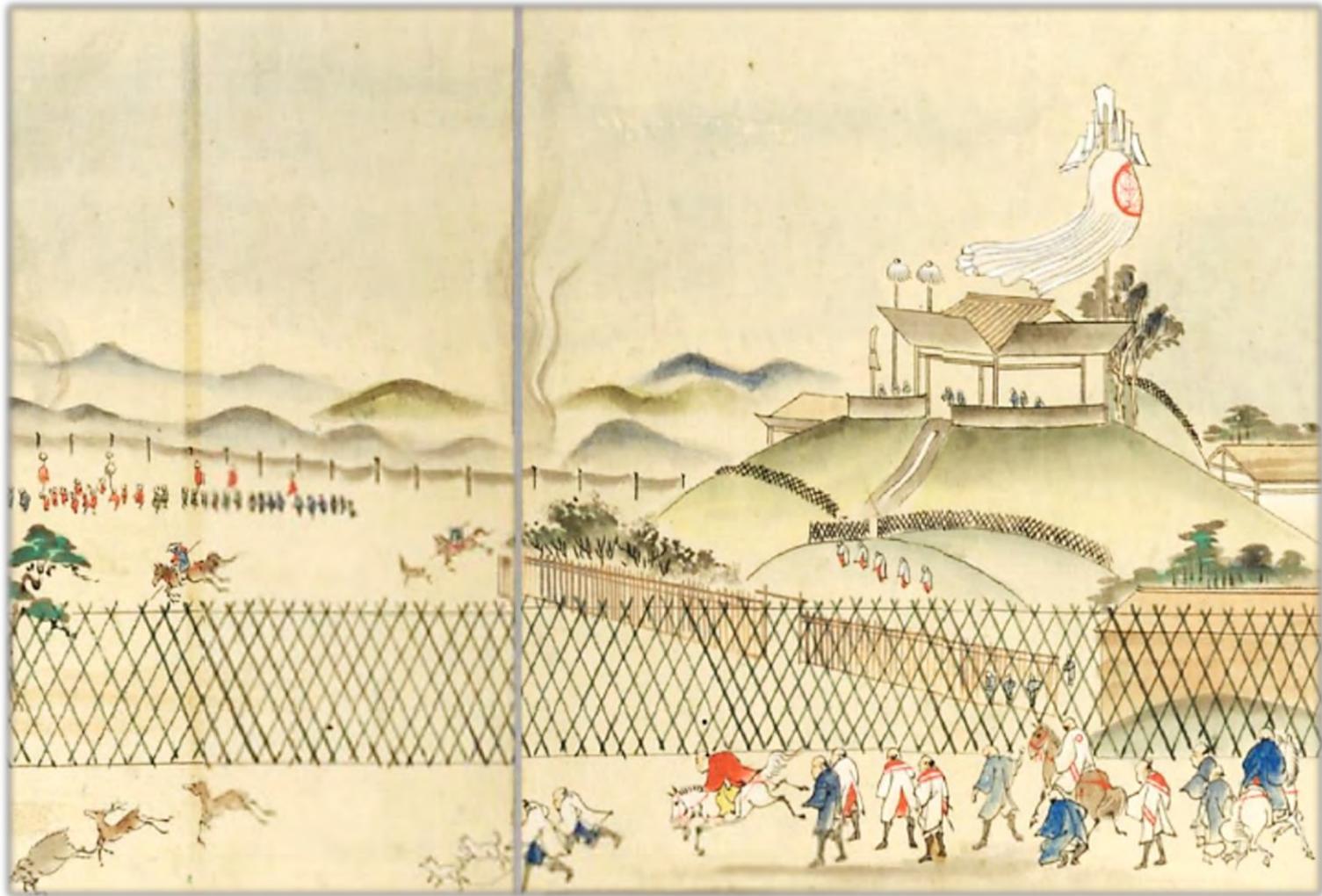
理乘院

浅草観音の「御成跡開帳」



寛政7年（1795）の小金原御猪狩

【昨年度のEAJRSワークショップの教材】



十一代將軍徳川家斉の小金原での御鹿（猪）狩

小金原御猪狩之図
（ケンブリッジ大学図書館所蔵）

寛政7年の小金原御猪狩



漢詩や和歌の舞台へ

享保18年に林信充が『飛鳥山十二景詩』を制作

元文4年の春に公家の冷泉為永が飛鳥山を訪れて、金輪寺の住持宥衛に和歌を進呈

折枝の色香をみすハあすか山
はなのところの春もしられし



金輪寺は冷泉為永が詠んだ和歌短冊を『飛鳥山十二景和歌』と題して保存

元文の頃、藤原勝行といへる老翁ありてこゝに短冊を鬻ぎ、遊客のよめる和歌をこひ集めして、寛保の頃台覧に備り、白銀を賜りし

新編武蔵風土記稿(飛鳥山)

飛鳥山の土器投げ

飛鳥山の名物となった土器投げは、宝暦12年頃より始まる(『銀杏栄常盤八景』)



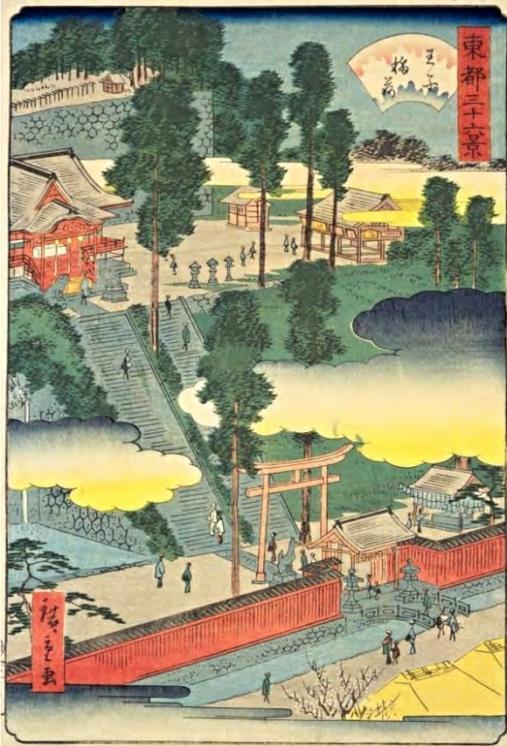
寝ぬ夜のすさび

今飛鳥山にて遊客戯に擲る土器ハ、もとハ燈明かハラけの小さきのを売りしが、**田畑に落ちて耕作の煩になるとて、百姓ともより止められて、売ることならで止**しが、其後何ものか、今の如く**土もてねりたるかハラけを作り出して、売はしめてより絶す、是ハ圃中におちても水気をうくれハ土となる故、煩にならず、され**は後も猶止むへからす

王子みやげの紙人形

俗事百工起源

王子の名物**紙人形**のはしめハ、むかし世に長唄てふに名を得し二代目荻江寄友といへる者の伯父なるもの、名を八郎右衛門と呼、(中略)このもの親元より手当を取て王子近辺にわひ住居せし折、紙にて人形を拵へ、手頭の動くやうの工夫をなし、丹にごふんにていかゝの色とりして、門口に出し売りしか、**子供の土産にハ面白し**とて、参詣の人毎に求めし故、思ひの外なる利潤を得しかは、其近辺のものも同しく拵らへ売しかはしめにて、今は王子の名物とハなりぬ、(中略)右八郎右衛門世を去りしハ安永六酉年正月廿二日なり



王子みやげの紙人形

世のすがた(天保四年跋)

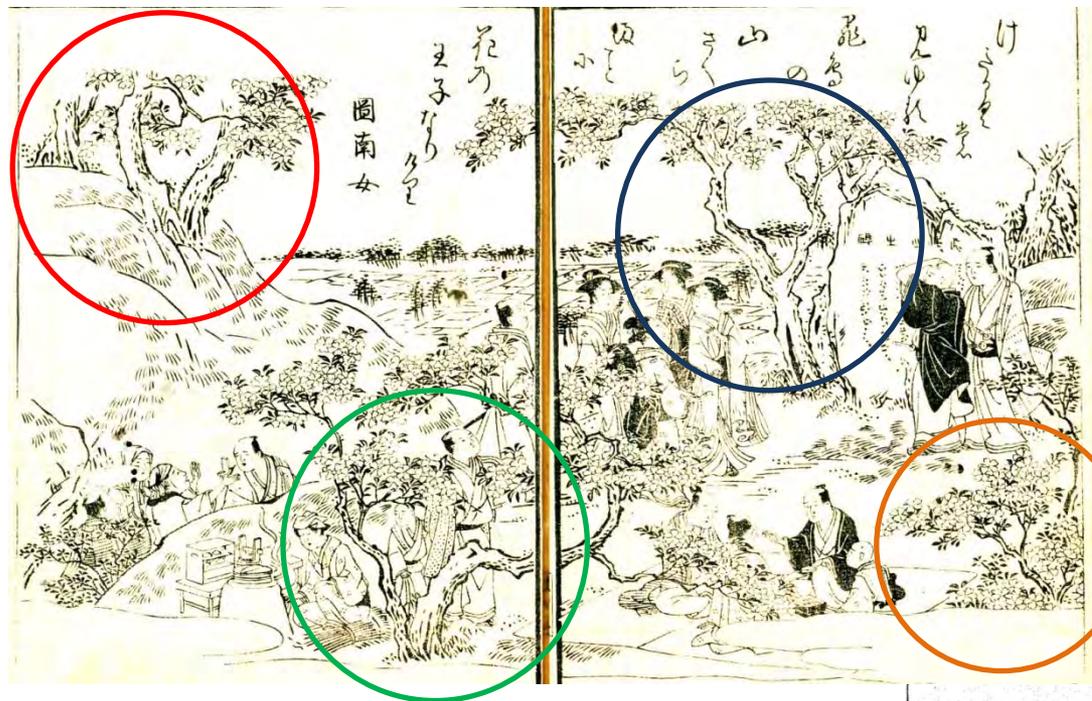
雑司ヶ谷土産の風車も、近來ハ花のかた
ちに紙を切りてつくりしもあり、王子土
産のきつねも、近來は錦絵同様にたくミ
につくり、芝居者の似顔・笑ひゑなとつ
くり出たす、これらハいつれも麁末にて
田舎の品めき珍らしきを愛する主意も、
いつか江戸市中の品にことならさるやう
になりたり



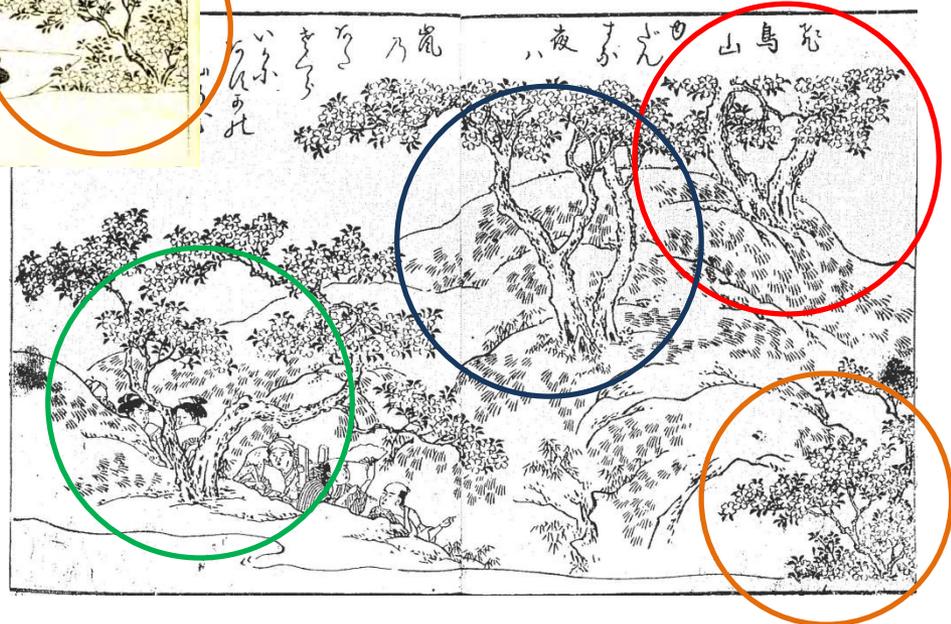
紙人形のサンプル
(現代の模造品)



名所絵本に取り上げられた飛鳥山



『絵本吾妻挾』
唐衣橘洲序 北尾重政画
天明6年正月刊



『絵本吾妻遊』
奇々羅金鷄編 喜多川歌麿画
寛政3年正月刊

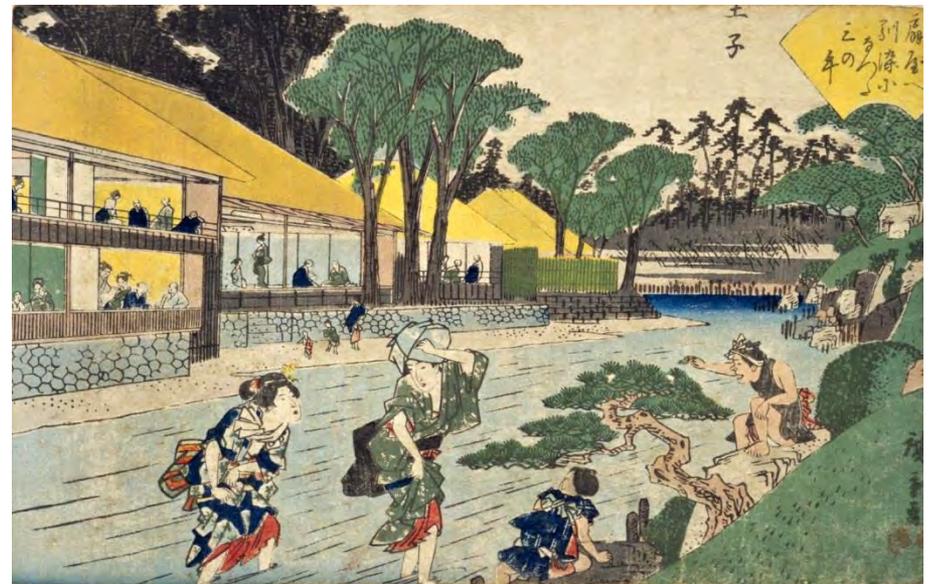
料理茶屋（海老屋・扇屋）

武江年表

寛政十一年の
春より、王子村
料理屋海老や・
扇屋見せひら
きあり

遊歴雑記初編（文化一一年序）

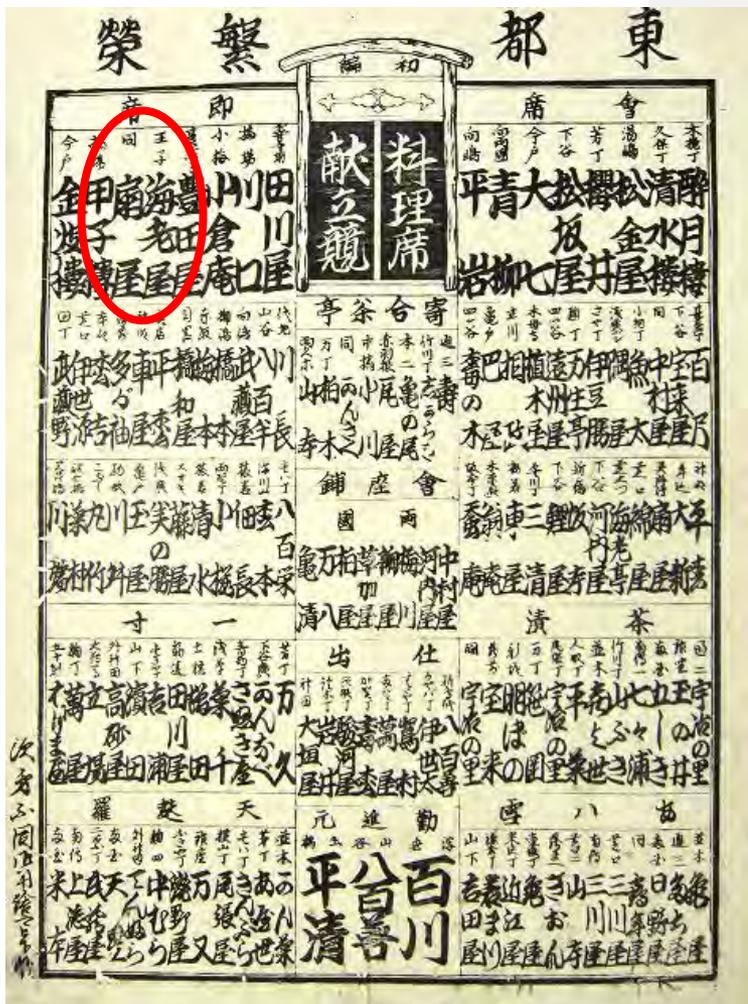
近年別して料理をひさく酒樓ハ、互ひに
庖丁と器物の好酬をあらそひ、中にも
あふぎや・海老屋の二軒茶屋ハ、軒をな
らべて高宅を巧ミに作り、料理の美味に
庖丁の手際なる、器物にハ善尽し、客の
需めに応ずるハ、辺鄙には賞すべき、殊
に辻竹輿ハ、何挺となく両店の前に居流
れて、草臥の人を扶けて歩行ざらしむ



料理茶屋（海老屋・扇屋）

寝ぬ夜のすさび

今海老屋・扇屋二軒の茶やハ知らぬ人もなく、名高き茶屋にて身代もよし、されと海老屋のかた勝らん、**かれは茶屋商売の間**に百姓をなし、又、米・麦・豆・さゝきの類の穀物を田舎より買出して売リ、又**玉子を売る事大なり**、近頃家の向ふ側の土蔵の際へ座敷を建てたり、茶湯座敷と、また丸座敷といふものを拵へぬ、此さしき殊の外よく評判になりたり、（中略）**今江戸の料理茶屋にて、客のくひたるものゝ残りたるを籠に入、持帰らするハ、此ゑびや・扇屋よりはしまれり**



江戸庶民の“総合行楽地”へ

あすか山 なんとよんたか おかむなり
此花を 折ルなだろうと 石碑見る
(誹風柳多留)

飛鳥山周辺の「行楽地」化

四季折々の楽しみ

春＝初午詣・飛鳥山の花見

夏＝王子の滝浴み・虫聞

秋＝滝野川の紅葉

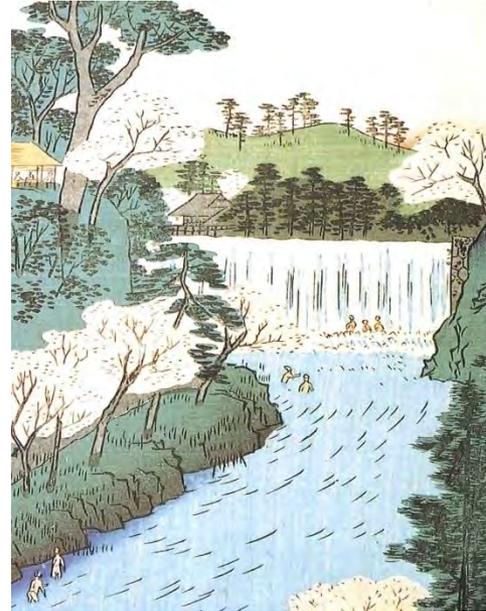
冬＝王子の雪見

娯楽の数々

飛鳥山の土器投げ

料理屋(海老屋・扇屋)

王子みやげの紙人形



文恭院殿御実紀附録

ある御燕閑のとき、御傍に候せし某物語の次に、王子筋へ年毎に成らせ給へども、いつも首夏のころなれば、飛鳥山の花も青葉のみなり、花盛の比渡らせ給はゞ一入御興も有べしと申上しかば、吾も左おもへり、しかはあれど、かの山の桜は享保に植させられ、花の所となりしよりこのかた、春は諸人つどひて花を翫ぶ事と聞しめし及ばせ給へり、しかるに成らせらるゝと仰出されなば、二・三日前より人の往来を禁ずべし、其内に風雨などあらむには、花は散過ぬべし、御一人の御慰に衆人春遊のさまたげたらんこと、いかゞと思召ゆへ、花のころは成せ給はず、こは飛鳥山のみにあらず、隅田川もまたしかりと仰有しに、聞えあげし人も恐懼して退きぬ、其後小納戸頭取御場掛の者を召出れ、飛鳥山・隅田川の花は、今も宜ひしごとくなれば、枯株もあらん時は心を附て植継せ、永く花の衰へぬ様にせよと仰ありし、すべて享保の芳蹤をつがせ給ふ事此類なり

享保の芳蹤